

十勝岳の火山活動解説資料

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

＜噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）が継続＞

5月29日から6月10日にかけて、一時的な火山性地震の増加や継続時間の短い火山性微動が観測されましたが、11日以降は火山性地震は少なく、火山性微動は観測されていません。

6日と15日から16日に実施した現地調査では、62-2火口は活発な噴煙活動が継続していました。振子沢噴気孔群は昨年秋の観測と比べ噴気量の増加が認められました。

十勝岳では、2006年以降、山体浅部の膨張が継続する中で、噴煙高の高い状態、地熱域の拡大や温度上昇、地震の一時的な増加など、火山活動の活発化を示唆する現象を観測していますので、今後の活動の推移に注意が必要です。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・地震の発生状況等（図1）

十勝岳では、5月29日から6月10日にかけて、一時的な火山性地震の増加や継続時間の短い火山性微動が観測されました。震源は62-2火口付近の浅いところと推定されます。

11日以降、火山性地震は日回数0～5回と少なく、火山性微動は観測されていません。

・噴気などの表面現象の状況（図2～6）

6日と15日から16日に実施した現地調査では、62-2火口は活発な噴煙活動が継続していました。また、地熱域の拡がりに特段の変化は認められませんでした。振子沢噴気孔群は昨年秋の観測と比べ噴気量の増加が認められました。

62-2火口では、6日の観測で火口底に熱泥水の湧出を確認しましたが、15日には熱泥水は認められず、熱泥水がみられた場所からは白色の噴気が噴出していました。62-2火口底ではこれまでも熱泥水の湧出がたびたび確認されています。

また、62-2火口内は昨年秋と比較して広い範囲で硫黄の付着が認められます。

振子沢噴気孔群では、6日の観測で東側に明瞭な噴気を確認しました。この場所からは昨年9月の観測時に弱いながら噴気が認められており、既存の噴気孔が活発化したものと考えられます。大正火口東壁は、特段の変化はありませんでした。

この火山活動解説資料は、札幌管区気象台のホームページ(<https://www.jma-net.go.jp/sapporo/>)や気象庁のホームページ(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)でも閲覧することができます。

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、北海道大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号 平 29 情使、第 798 号）。また、同院発行の『電子地形図（タイル）』を複製しています（承認番号 平 29 情複、第 958 号）

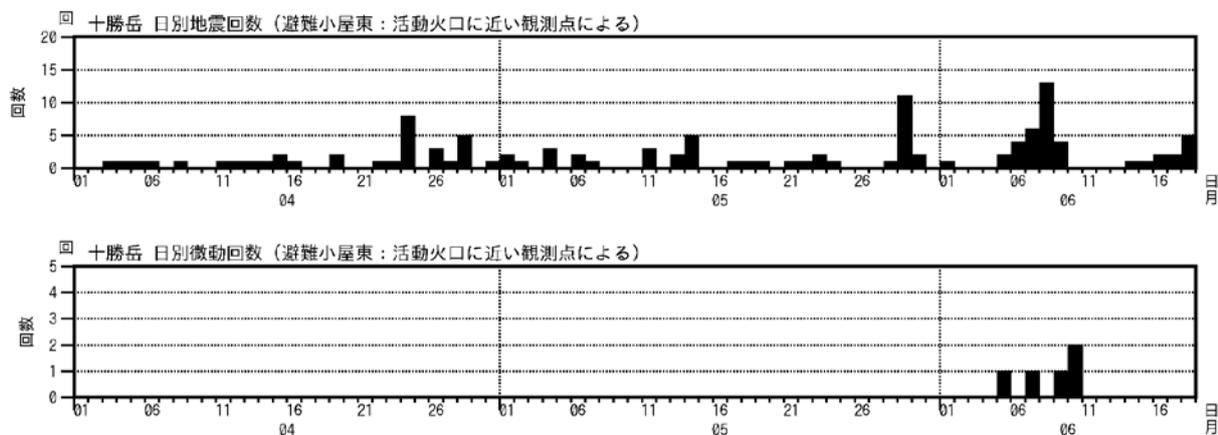


図1 十勝岳 火山性地震及び火山性微動の日別回数（2018年4月1日～6月18日15時）

回数は速報値です

- ・火山性地震は、5月29日（日回数：11回）と6月8日（日回数：13回）に一時的に増加しました。その後は少なく経過しています。
- ・火山性微動は、6月5日から10日にかけて5回観測されました。その後は観測されていません。

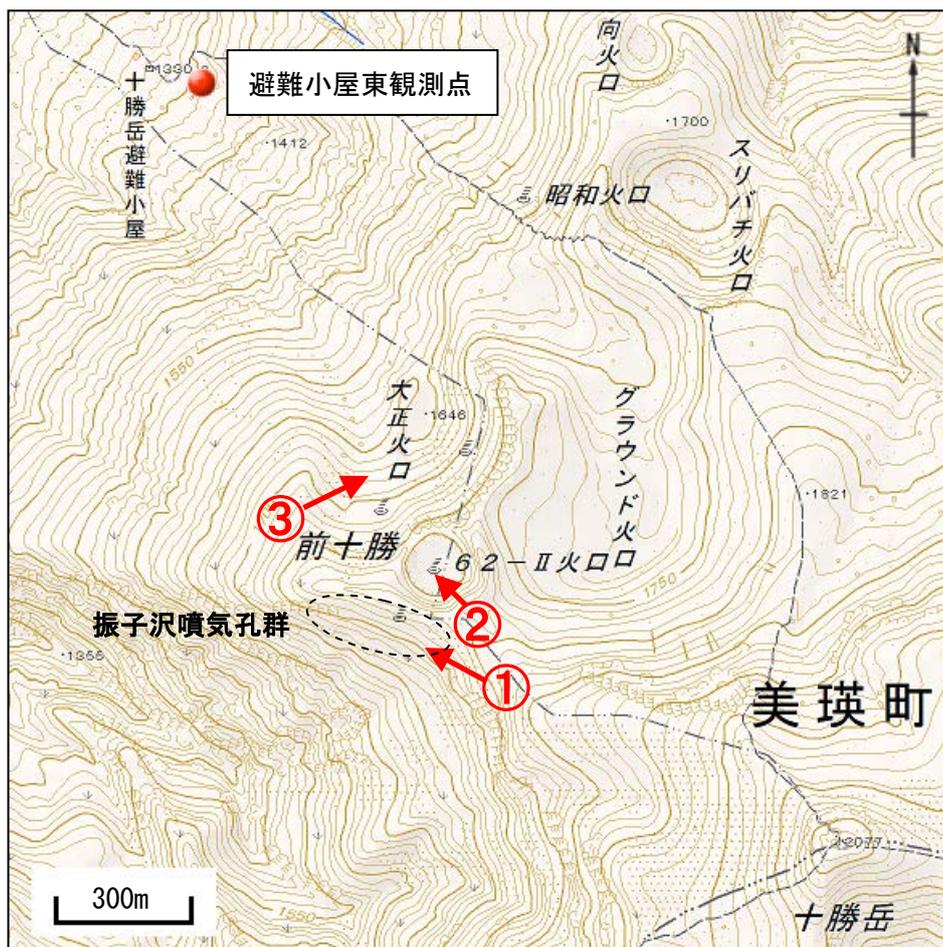


図2 十勝岳 火口周辺図と写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）

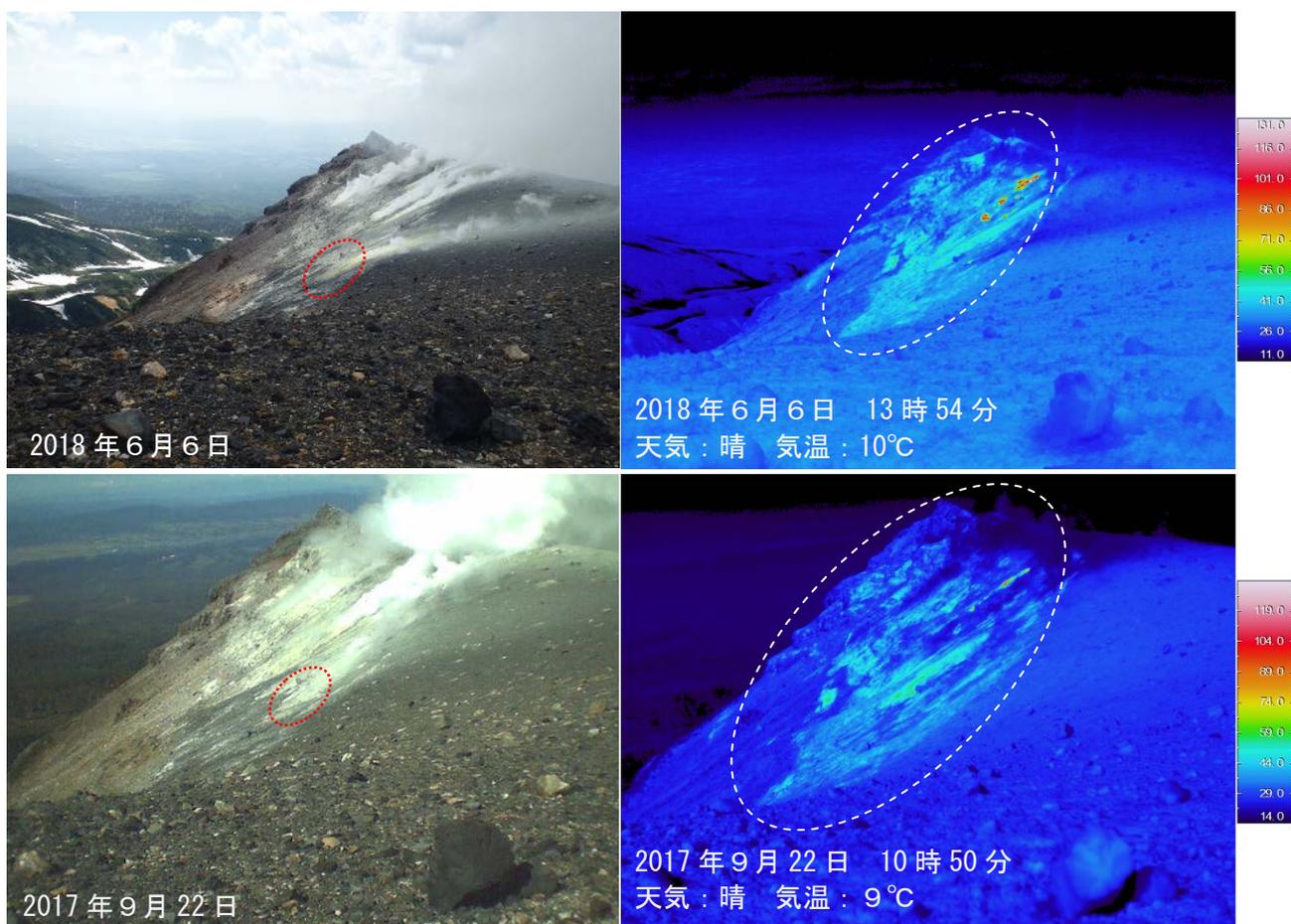


図 3 十勝岳 赤外熱映像装置による振子沢噴気孔群の地表面温度分布の比較
南東側（図 2 の①）から撮影

- ・ 2015 年 6 月に確認された、振子沢噴気孔群の地熱域（白色破線）の拡大した状態は継続していました。
- ・ 振子沢噴気孔群では、6 日の観測で東側に明瞭な噴気（可視画像の赤色破線）が確認されました。この場所からは昨年 9 月は弱いながら噴気が認められており、既存の噴気孔が活発化したと考えられます。



図 4 十勝岳 62-2 火口内の状況
南東側（図 2 の②）から撮影

- ・ 6 月 6 日に熱泥水の湧出を確認しましたが、15 日には熱泥水は認められず、熱泥水のみられた場所からは白色の噴気が噴出していました（赤色破線）。

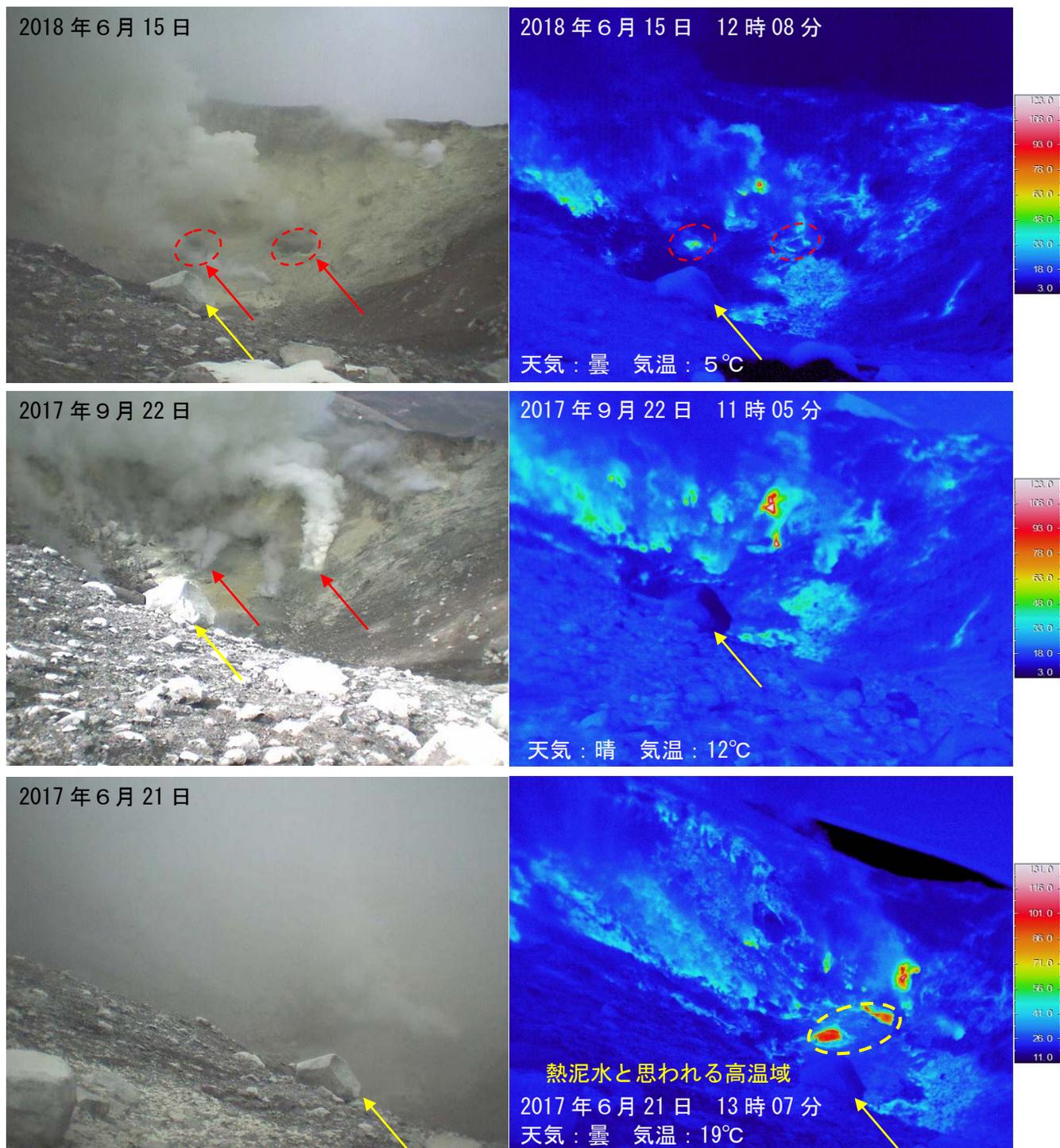


図5 十勝岳 赤外熱映像装置による62-2火口内の地表面温度分布の比較
南東側（図2の②）から撮影

黄色矢印は同じ岩を示します。赤色矢印は同じ場所を示します。

- ・62-2火口の地熱域の拡がりに特段の変化は認められませんでした。
- ・62-2火口は北西側内壁を中心に活発な噴煙活動が継続していました。
- ・62-2火口内は昨年秋と比較して、硫黄の付着が火口内全体に広がっていました。
- ・62-2火口底では、6日に熱泥水を確認しましたが15日には熱泥水は認められず、熱泥水があった場所（赤色破線部）からは白色の噴気が出ていました。62-2火口底では過去にも熱泥水が確認されています（黄色破線部）。

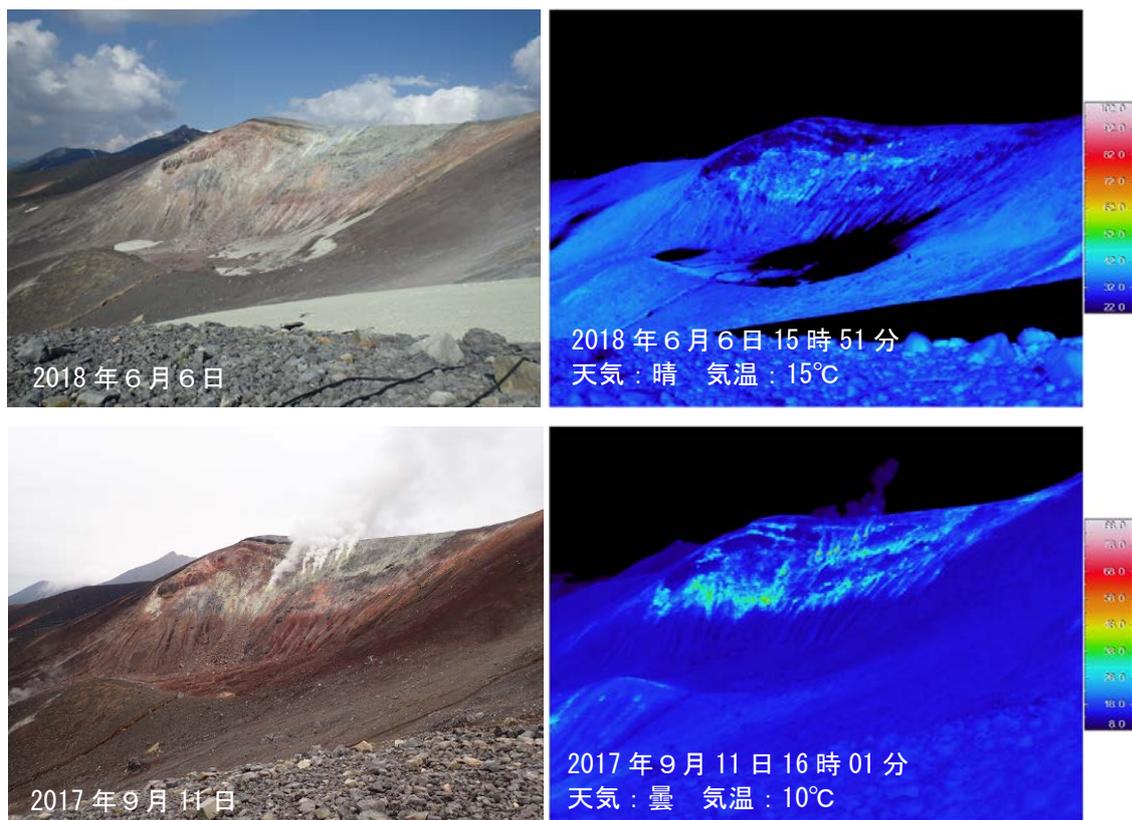


図6 十勝岳 赤外熱映像装置による大正火口東壁の地表面温度分布の比較
南西側（図2の③）から撮影
・大正火口東壁では特段の変化はありませんでした。